

宰相閣下とパンダと私

登場人物 紹介

セシリア

アルカス公爵家令嬢。
イクスに好意を寄せ、
アヤに嫌がらせを
するけれど……？

サラディン

白騎士隊の隊長。
無表情な美人さんで、
やや変わり者。

アラン

赤騎士隊の隊長。
ちょっと苦勞性の、
気のいいお兄さん。

イクスファード

宰相にして、アヤの雇用主。
冷静沈着で感情が読みにくい、
アヤにはなにかと優しい一面も。

アヤ

亡き父のせいで借金生活を送っていた17歳の女子高生。
前向きなしっかり者で、
とても気の利く性格。

アンネ

城で働く侍女。
アヤの異世界初の
友人となる、
心優しい女性。

イクスディア

天使のような美少年。
アヤのことが大好きで、
彼女が連れてくる
パンダもお気に入り。

パンダ

パンダそっくりだが、
実は異世界の聖獣。
アヤに懐いていて、
行動がやけに人間くさい。

目次

プロローグ	7
第一章 異世界よ、こんにちは	8
第二章 宰相閣下の小間使い	63
第三章 温泉へ行こう！	135
第四章 城下街の孤児院	197
第五章 秋の大祭	244
エピローグ	296

プロローグ

今日も、朝から麗しの宰相閣下の怒声がルドルフアン王国の王城に響き渡った。

「アヤー!! 触るなど何度言ったらわかるのだ!!」

「知りませんよ、そんなこと!! 大事なものなら、ちゃんと手の届かない場所にしまっけて、鍵をかけたけって話なのよ!!」

続いて聞こえてきた少女の声に、城の者は「ああ、またか」という顔をした。

宰相閣下と少女の怒声の応酬は、二人にとって日課のようなものである。これを聞いた城の者は、「今日も平和だなあ」と思うのだ。

朝の怒鳴り合いだけを見れば、とても仲が悪い二人に思える。しかし、城の者はこれが犬も食わぬなんとやらだということを知っているため、二人の間に決して入ろうとしない。

この少女と宰相閣下の物語を、最初から語ることにしよう――

アヤ——葛城綾、十七歳は幸薄い人生を送ってきた女子高生である。

アヤが物心ついた頃に、母親はいなくなつた。近所のおばちゃんの話によると、若い男と逃げたらしい。

その後は、酒におぼれた父親と二人暮らした。しかしその父親も、酒が祟つてアヤが中学二年生の時に死んだ。莫大な借金という負の遺産を残して。

相続を放棄したが、父親が金を借りていた先はまっとうな相手ではなく、法的な手続きは意味をなさなかつた。

頼れる親類もいなかつた。いや、親類自体はいたのかもしれないが、大きな借金を前に逃げ出したのだから。途方に暮れていたアヤに、父親の昔の友人という人が、中学を卒業するまで後見人として金銭の援助をしてくれた。そして高校二年生の現在、バイトで稼いだお金と奨学金で、アヤは辛うじて高校に通えている。

そんな薄幸少女アヤは本日、飲食店でのバイトの給料日を迎えた。切り詰めて生活している毎日だが、今日はちよつと贅沢をしてクリームコロッケを買ってしまった。冷めないうちに帰って食べたい。

十分ほど前までルンルン気分でした。帰途についていたはずが——現在、アヤは借金取りから逃げるため、繁華街を全速力で駆けていた。東京の夜の繁華街に、セーラー服姿は非常に目立つ。

「待てやコラア！」

「金返せやコラア！」

「くうっ、しつこい！」

追ってくる借金取りに、アヤは焦る。

どうやら、アヤの給料日が今日だということをかぎつけたらしい。この分では、またバイトを変えねばならないだろう。

——今のバイトは、食事がつくから気に入っていたのに！

こんなんじや落ちてきてささやかな贅沢も味わえない。それもこれも誰のせいかと言えば——「恨むからね、クソ親父ー!!」

すべては父親が残した、闇金からの借金が原因である。

なにをどうやったらこんな金額になるんだという借金は、臓器を売っても返済できないかもしれない。女の子であるアヤには、『春を売る』という手段も残っていた。それこそ、借金取りが勧めてくる常套手段である。しかし——

「私にだってねえ、夢も希望も恋愛願望だってあるのよ！」

走りながら、アヤはやけくそのように叫ぶ。

少女漫画みたいな恋を期待してなにが悪い、白馬の王子様を信じちゃいけないのか。いや、この

際白馬じゃなくても、茶色でも、ぶち模様でも構わない。いっそ、王子という条件だつてなくてもいい。

「だから、神様仏様閻魔様、誰でもいいから、私を借金取りのいないところに連れて行ってくださいー!!!」

そんな心の底からの叫びに、誰かが答えた。

『助けてあげるから、あの路地に飛び込むんだ』

声の主は誰だとか、そもそも走っているアヤの耳元で声が聞こえているのは何故だとか、そんなことは、今のアヤにとつて些細な問題だった。

「とうっ！」

切羽詰まっていたアヤは、なにも疑わず、言われた通りに細い路地に飛び込む。

直後、パアアッ！ とアヤの周囲が光った。

「ちよっ、なに!？」

あまりのまぶしさに、アヤは思わず目をつぶった。

それからすぐに、借金取りたちも路地に飛び込む。

「あの娘、どこに行きやがった!」

「確かにここに入ったはずだ!」

だが、彼らが見た路地には汚いゴミ箱が転がっているだけで、あるはずの姿はどこにもなかった。一方、光に包まれたアヤはというと――

しばらくしてまぶしさを感じなくなったアヤは、ゆっくりと目を開ける。

「あれ?」

さつきまでアヤがいたのは、繁華街のアスファルト道路の上だった。なのに今いる場所は――

「なんで木がいっぱい? なんで土?」

うっそうと木が生い茂った、森のようなところであった。

「え? え?」

周囲の様子がよく見えない。夜なのに外灯の類が全くないので、真っ暗闇なのだ。

「なに、なんなの、どうしたのよお」

状況についていけず、アヤはその場にへたり込んだ。セーラー服のスカート越しに、地面の湿った感触が伝わってくる。やがて、涙が滲んできた。

「うー、私になにしたって言うのよお」

今更ながら、さんざん借金取りに追いかけられた恐怖が襲ってくる。ひと粒零れ落ちた涙をきっかけに、アヤは号泣した。

それから泣き続けること、数十分。

まだ泣いていたい気もする。が、そうしてばかりもいられないのが人間だ。

「おなか空いた……」

アヤは昼からなにも食べていなかった。いつもならばバイト先の飲食店で夕食のまかないを食べて帰るのが、今日は給料日だったため、家に帰って好きなものを食べようと思ったのだ。



「あ、そうだ」

そこで、アヤは持っていたクリームコロッケの存在を思い出す。すっかり冷めてしまっただろうが、食べられなくなったわけではない。

「うん、これを食べて、ここがどこか考えよう」

それから近くの交番にでも駆け込んで、家に帰してもらえばいい。そう考えると元気が湧いてきた。アヤはいそいそとクリームコロッケを袋から出す。時間が経ったせいで、少々しっとりしていた。

「いただきます！」

クリームコロッケを食べようとした、まさにその時――

ガサツ、ガサガサツ……

向こうの方から、草が揺れるような音がした。アヤは警戒して立ち上がる。

「まさか、あいつら!？」

借金取りが追いかけてきたのだろうか。ということは、この場所はその繁華街はんかがからあまり離れていないのかもしれない。

「逃げる!? ていうかどつちに!? ああでも、コロッケ食べなきゃ!」

異常な状況に、アヤはパニックを起こしていた。その間にも何者かの気配は近付いてくる。

ガサガサツ!

やがて大きな音がして、草むらの奥からなにかが姿を現した。

「きゃー！ー！」

アヤは目をつむって力一杯悲鳴を上げる。叫んで叫んで、息切れを起こすまで叫び続けた。しかし、相手が襲ってこないの、恐る恐る目を開いて気配のする方向を見る。

果たしてそこにいたのは――

「……パンダ？」

「ガル」

パンダであった。この独特の模様は見紛うはずもない。だが、アヤの知っているパンダと違う点がある。

「何故にショッキングピンク？」

アヤの目の前のパンダは、本来なら黒いはずの部分の毛がショッキングピンクの色をしていた。ずっと見つめていると、目がちかちかしてくる。しかも、よくよく目を凝らせば背中に小さな羽が生えているではないか。その羽はアヤの手のひらサイズ。とても飛ぶことができるとは思えない。だからといって身体の大きさに見合った羽の方がいいかというと、それはそれで怖い。

ひたすら混乱しているアヤに、パンダ（仮）はそのそと近寄ってきた。そして、アヤが持っているクリームコロッケをじーっと見つめる。口元からはよだれが垂れていた。

「……ひよつとして、欲しいとか」

「ガル！」

パンダ（仮）は返事をするように鳴く。パンダは笹を食べるのだから草食のはず。だったらそこ

らの草でも食べていろ。あ、でもクマは雑食だから、こんなのも食べるのかもしれない。しかし、これはそもそもパンダではない別のなにかなのでは――

「……おなか壊しても、自己責任だからね」

結局アヤは、パンダ（仮）の物欲しそうな視線に負けて、貴重な食料を分かち合うことにした。パンダとクリームコロッケを半分こして食べてから、アヤは改めてこれからのことを考える。

人間は極限まで混乱すると、ぐるっと一周して正常になるらしい。

「よし、ここがどこだか知らないけれど、民家くらいあるわよね」

とりあえず自分がいる場所を把握するのが先決である。民家で場所を尋ねて、遠ければタクシーか電車で家に帰ればいい。出費は痛いけれど、ここでパンダ（仮）といてもどうにもならない。

そう心に決めて、アヤは立ち上がって荷物を持った。荷物といっても学校指定の通学バッグだけである。暗闇に目が慣れてきたこともあり、月明かりで周囲の景色がぼんやりとわかってきた。どうやら森かどこからしく、見回す限り木々に囲まれている。車の走行音らしきものはしない。道路から相当離れているのだろうか。

人里離れた山で遭難イコール白骨死体、という方程式が脳裏を過った。

「いやいや、車が通らないド田舎って可能性もあるしね！ 案外すぐそこに民家があったりするのよ、こういう場合！」

アヤは己の思考回路を都合がいい方に導きつつ、勢いにまかせて、ざっくざっくと緑が生い茂る土の上を進んでいく。道などはない。草を分け入って進むアヤのセーラー服のスカートには、葉つ

ばがたくさんくつついていた。

そして何故か、パンダ（仮）が後ろからついてくる。

「なんでついてくるの？」

「ガル！」

しまった、ひよつとして餌付けをしてしまったのかもしれない。

このまま、このショッキングピンクと白のパンダ（仮）を人里まで連れて歩くということに、アヤは危機感を覚えた。こんな生き物を連れていたら、完全に不審者だ。どこかでこのパンダ（仮）を撒かねばならない。しかし、こんな野外で、野生と思いき動物に人間が果たして勝ちえるのか。アヤが脳内でシミュレーションをしつつ歩いていると、間が悪いことに明かりが見えてきた。

だが、やがて視界に広がった光景に、アヤは呆氣にとられる。

「トンネルを抜けるとそこはお城だった」

思わず、そのようなフレーズが口からこぼれた。

トンネルはなかったし、森っぽいところを突っ切ってきたただけだ。

「何故にお城？」

アヤが呆然と見上げているのは、石造りの重苦しい西洋風の城だった。おとぎ話の城みたいな優雅さはなく、どちらかというドラキュラでも住んでいそうな雰囲気だ。

見回すと、松明の火が盛大に焚かれている辺りに、いかにも門番っぽい二人の人間を発見した。

しかし、ここで新たな問題が発生。

その二人が、なんだか物騒な服を着ているのである。

「何故に鎧兜？」

兜はフルフェイスというやつか、バイクのヘルメットよりもっと通気性が悪そうである。身体を覆う鎧も、ガッチガチの金属製でもすごい重量感だ。あのような格好で、はたして動けるのか？ それとも立っているだけの仕事だからあえてアレなのか。自分だったら、あの格好で怪しいやつを追えと言われても、無理だと答えるしかないだろう。

気になることばかりではあるが、人間を発見したので次のミッションに入らねばならない。二人に声をかけて道を探ねるのだ。アヤはしばしためらい、考える。そして結論を出した。

「……違う家を探すのもアリよね、そうよね」

そもそも、ここはアヤが目的としていた民家などではない。自分ももっとごんまりとした、二人くらいが暮らしている家を探していたのだ。決してドラキュラ城を探していたわけではない。

「場所を移動しましょう。やり直しもアリということだ」

「ガル」

物騒な鎧兜を目の当たりにして、アヤとパンダ（仮）の間には謎の結束が生まれていた。

しかしアヤたちが離れる前に、門の前に立っていた二人に気付かれる。

「何者だ!？」

「王の森への侵入者か!？」

気付かれて、なおかつ向こうから声をかけられたのであれば仕方がない。アヤは二人の方を向い

て口を開いた。

「えっと、実は道を聞きたくて——」

ピーッ!!

そう言いかけたのと、甲高い笛の音が夜空に響いたのは同時だった。

「侵入者だ! 捕らえろ!」

「え、え、え?」

アヤは状況がわからず、呆けて立ち尽くす。今の状況、なんだか時代劇に出てくるシーンに似てるなあ、などのん気なことを考えてしまった。

そんなアヤのスカートを、ぐいぐい引つ張るものがある。そちらを見ると、パンダ(仮)がスカートに噛み付いて引つ張っていた。アヤは慌ててスカートを引つ張り返す。

——やめろ、スカートに穴が開いたらどうしてくれる!

パンダ(仮)とそんな無言のやり取りをしているうちに、ドラキュラ城の門の向こうが騒がしくなってきた。先ほどの二人も、ガシャガシャとアヤたちに向かって走ってきている。よくわからないが、このままここに立っていたら、やばそうな雰囲気である。

「逃げる!」

「ガウン!」

パンダ(仮)を連れて、アヤは再び森に入った。そしてひたすらに走る、走る、走る。

森の中をがむしゃらに逃げて、鎧兜に追いかけること約十分。あちらは見るからに重装備だ

が、こちらは身軽なセーラー服だ。その分、距離をだいぶ稼げたところで、アヤは立ち止まって息を整えながら、今の状況を考えて。

ひよっとしてこは、勝手に入ったら怒られるような場所だったのかもかもしれない。だったらさっきの警戒体制も納得できる。逃げるから怪しまれるのであって、素直に投降して話せばわかる……いや、やっぱりあの鎧兜はダメだ。

あんなものを着た人間と友好的なコミュニケーションができるほど、アヤは人間ができていなかった。たとえば特殊なコスプレの人だとしても、凝りすぎである。ものすごく怖い。

「いたか?」

「いや、いない」

休憩しすぎたのか、アヤの近くで声が出た。

もう一度逃げる決意を固めたアヤは、できるだけ物音を立てないように、そろそろと移動する。

そんな空気を讀んだのか、パンダ(仮)も静かに歩いていた。

鎧兜の音がしなくなったところで、アヤは再び空腹を覚えて呻く。

「あー、クリームコロッケはすっかり消化されたわ」

空腹な上、めいっばい走らされたせいで、アヤはすっかりやさぐれていた。

「誰か私に食べ物くれ……」

目の前に生えている木が、実はお菓子の木だったりしないだろうか、とアヤが木を撫でつつ真剣に考えていると——

「そこにいるのは誰だ」

突然、男の声がした。

鎧兜のガチャガチャという音がしなかったので、アヤはすっかり安心してしまっていた。慌てて逃げようとしたが、空腹を思い出して力が抜けた身体はうまく動かず、おたおたしていたパンダ（仮）に躓いてこける。

——くそう、この獣め！

慌てて体勢を整えていると、肩にひやりとしたものが触れた。

アヤは嫌な予感がして、ぴたりと動きを止める。

「逃げずともよい。こちらも騒がれては少々困る身の上だ」

背後からの声に、アヤはゆっくりと振り向く。肩に触れているのは、鈍く光る長いものだった。

それは、アヤの知識が確かならば、剣とかいうやつにとても似ている気がする。

——すつごく出来がいいけれども、ニセモノだよな？ コスプレの装備品だよな？

当たったら痛そうだけど、本物なわけではないか。

そう自分に言い聞かせつつも、アヤは冷や汗をだらだらと流す。背後の男は、全身をすつぽりと布で覆い、フードを目深に被っていた。

——怪しい！ 全力で怪しすぎるよ！ 何者だよアンタ！

口元は布で覆われていて視認できるのは目元のみ。あまりに不審者すぎる。こんな人間に「怪しくないよ」と言われても、誰だって逃げ出すだろう。

「森の中で大きな魔力の動きを感じたので、様子を見に来たのだ。今はもう消えたが」

男が意味不明なことを言う。

「お前、見たところ、この国の者ではないな。どうしてこの森にいる？」

どうしてと聞かれても、こちらが聞き返したいくらいである。おなかは空いたし、鎧兜に追いかけられるし、アヤはもうキャパオーバーだ。

そこでアヤは開き直り、ありのままを答えることにした。

「私にもわかりません。気付いたらこの森にいたんです。むしろ帰り道を教えてください」

アヤの正直な答えに、男はとまどった様子である。

「……本当だとしたら、転移魔法の事故か？」

またもや意味不明なことを言う。

「嘘は言っていますせん」

アヤはゆっくりと両手を上げる。なにも持っていないよ、危なくないよアピールだ。お願いだから自分など構っていないで、さっさとコスプレ会場に行ってくれ。アヤの中で先ほどのドラキュラ城は、秘密のコスプレ会場に確定している。

アヤの隣で、パンダ（仮）も両前足を上げていた。アヤの真似をしているのかもしれないが、その体勢はどう見ても「今から狩りをするぜ」にしか見えない。

男は、怪訝な目でパンダ（仮）を見る。こんな珍妙な生物が存在するのか、という疑問を持っているなら、アヤも同じ気持ちだ。

「いずれにしろ、ろくな装備も持っていないようだ」

そう言いながら、男はアヤの肩から剣っばいものを引っ込めてくれた。

「森を抜けて街に出るといい。迷子ならば、そこで助けを求めろんだな」

秘密のコスプレ会場の客じやないのなら、さっさとどっか行けよ、ということだろうか。男は、アヤの答えなど確認せず、森の奥へと姿を消した。

そちらはコスプレ会場とは逆方向である。どっかに買い出しの途中だったとか？ うん、そうだ。そうに違いない。

これで、とりあえずの危機は脱したのだろうか。というか、迷子だと思ふのなら、人がいるところまで送ってくれてもいいではないか、ケチな男め。

なにはともあれ――

「……腰抜けた」

「ガル？」

アヤは立ち上がれないまま、三十分ほどその場にしゃがみ込んでいた。

* * *

フードの男が進んでいった森の奥では、一人の少女が彼を待っていた。

「オル様あ、遅かったね」

「ああ、ちよつとな」

男は少女への返事を濁し、逆に問いかける。

「なにかわかったか？」

「ん〜ん、変な魔力だったけど」

「そうか」

男は少し考えると、一つ頷く。

「問題があれば叔父上が対処なさるだろう。もう行くぞ」

「オル様、問題丸投げ〜」

二人はそんな会話をしつつ、森の奥へ去っていった。

* * *

シヨックから立ち直ったアヤが再び森の中を進み始めてから約一時間後。うまく追っ手から逃げ切ったはいいものの、アヤとパンダ（仮）は迷子になった。

「ああもう、どっちに行けばいいのか、わかんなくなっただじやない！」

夜の森で移動しようとしたことが悪いのか、はたまたパンダ（仮）を道案内にしようとしたことが悪いのか。パンダ（仮）はのん気にあくびなんぞしている。

ああ面倒臭いから、もうパンダでいい。パンダ（仮）の名前は今からパンダだ。アヤはシヨッキ

ングピンクと白の生き物を、パンダと名付けた。

「うう……おなか空いた疲れた眠たい」

辺りを見回しても、自分が今どこにいるのかわかるような手がかりはなにもない。今夜はもう、これ以上動かない方がいいのだろうか。

「けどそうになると、野宿なのね……」

いまだきの女子高生が野宿。しかも公園でとかではなく、森で野宿。その上、ロクに装備すらない。

いや、一つだけあった。暖をとるのにうってつけの装備が。

「ガル？」

アヤにじっと見つめられたパンダが、不思議そうに首を傾げる。

「パンダ、ちよつとそこに横になりなさい」

「ガル」

言葉が通じたのか、はたまた偶然か、パンダはごろんとその場に転がった。だらんと四足を投げ出すその姿は、獵師にトドメをさされたクマのようであった。

「よし、天然の毛布確保」

アヤはパンダの毛にしがみつки、寝心地のよいポイントを探る。

「おやすみ」

一応パンダに声をかけて、アヤは目を閉じた。

父親が死んで以来、アヤが誰かと一緒に寝るのは、これが初めてである。この場合は「誰か」ではなく「なにか」と言う方が正しいだろうが。

生き物の温もりは存外心地よく、アヤはすぐに眠りに落ちたのであった。

そして、夢も見ずにぐっすりと眠った次の日の朝。

日の出と共に、アヤは猛烈な空腹感に襲われて起きた。自分が目を覚まして、パンダはまだ寝ている。のん気に寝息を立てているパンダをじっと見ていると、肉の丸焼きに見えてきた。かなりの重症である。

パンダにとって幸運なことに、アヤはパンダを捌けるだけの刃物の類を持っていなかった。刃物と名の付くもので通学バッグに入っているのは、カッターナイフだけである。さすがにカッターナイフではパンダを捌けない。

己の身の危機が迫っているかもしれないとは微塵も思わないのか、野生失格なパンダが起きたのは、太陽が程よく昇った頃であった。

「今日こそは森を抜けて、誰かに道を尋ねるんだからね！」

気合を入れてみたものの、富士の樹海で遭難の末、白骨化——という新聞の見出しがアヤの脳裏を過る。いやいや、ここは富士の樹海じゃないと思うし、とアヤは頭を激しく振って己の考えを消し去った。

「パンダ、あんたも気合入れないと、朝ご飯が手に入らないんだから、人里を探しなさいよ！」

「ガル！」

パンダの返事は勇ましいが、いまいち信用に欠ける。それでも、動物の嗅覚に頼った方が、早く森を抜けられるだろう。何度撒こうとしてもアヤについてきてしまうので、パンダを逆に利用するため一緒に行動することに決めたのだ。

「さあ行くのよ、パンダ！」

「ガオーン！」

本当に大丈夫なのか、と不安を抱きながらも、パンダの後をついていくアヤなのであった。

それから、一人と一匹で数時間も歩いた頃、見事森を抜けた。それも人里らしき場所に出たのだ。「えらいパンダ！」

「ガル！」

アヤとパンダがたどり着いたのは、昨夜の城門よりもっと大きい門だった。門の向こうに垣間見えるのは、石畳の街並みだ。その街並みのはるか向こうにドラキュラ城が見えたが、アヤは気付かなかったフリをした。

街の入り口の雰囲気は、日本にある夢の国の入り口というより、RPGのお城の入り口に近い。どちらにしても現実離れしているけれども。

疑問に思うことは多々あるが、今は何より食事が先である。腹が減っては戦はできないのだ。

街の門にも、見張りの人間が立っていた。しかし昨夜の門番と違って鎧兜ではない。普通の衣服の上に、革つばい防具を身につけている。

なんだその格好、現代日本で見たことないぞ、なんてことは今は気にしない。というより、考え

ない方がいい。

——とりあえず朝ご飯だ!!

アヤは意気揚々と門を通って街に入ろうとする。

しかし、その時——

「ちよつとキミ、登録証を見せて」

門の前に立っていた見張りの男性に呼び止められた。なんだ登録証というのは、とアヤは首を傾げる。横でパンダも釣られて首を傾げていた。

そんなアヤの様子を怪しんでいるのか、男性はじろりとこちらを眺める。

「登録証がないと入れないな」

男性は冷たくそう言うと、しっしっしと手を振ってアヤを追い返した。

RPGでは、門というものはすべての人に分け隔てなく開かれているものではないのか。そればかりか置いてある宝箱の中身すらくれるというのに。

——あの心の広さを見習え！ RPGつばいのは見掛けだけか！

そんなことを心の中で愚痴りつつ、アヤはパンダと一緒に「入れろ」と騒ぐ。しかし、どんなに騒いでも、門番の態度は変わらなかった。

「おなか空いたねえ、パンダ」

「ガルウ」

一人と一匹は、先ほどの門番の男がいる場所から少し離れた壁にもたれ、座り込んだ。街がすぐ

そこにあるのに入れないとは。世の中はなんて冷たくできているのだろうか。

とはいえ、そもそもアヤの目的は街に入ることではない。道を尋ねて、最寄のコンビニの場所を聞き出せばいいのだ。だから門番の男にも、先ほど尋ねた。

『ここから最寄のコンビニには、どう行けばいいですか』

門番の男の答えはつれないものだった。

『コンビニなんて街は知らんな。どこの田舎いなかから来たんだお前』

コンビニを知らないとは、そっちこそ田舎者ではないか！ と激怒したアヤを、パンダがこまで引つ張ってきたわけである。パンダにフオーされるなんて、人間としていかなものか。

しかし、壁を背にして座り込み、空を見上げていると、今まであえて考えないようにしていた疑問が、アヤの心の内に湧き上がってくる。

「ねえパンダ、ここってどこかなあ？」

周囲には電線もアスファルトも、車も見えない。アヤの目の前に広がっているのは、土がむき出しになっている道路と、こんもりとした森である。少なくとも見渡せる範囲はすべて森だ。この森を半日で脱出できてよかった、とアヤは心から思った。

それはともかくとして、日本国内でも探せばこういうところがあるのかもしれないが、昨夜、あの光に包まれる直前までアヤがいたのは都会だったはずだ。アヤとパンダが抜けてきたような、森なんてなかった。

だとしたら、ここはどこだと言うのだろうか？

「ここって日本じゃないのかなあ」

少なくとも、日本にあんなドラキュラ城があったら、有名になっているはずだ。だが、アヤはそんな噂うわさを聞いたことがない。

アヤは、自分があつた森にいた直前のことを思い返してみた。アヤは「助けてあげる」という誰かの声に従って、あの時路地へ逃げたのだ。

今にして思えば、アヤはどうして誰のものかもわからない声を信じてしまったのだろうか。知らない人についていってはいけないことは、幼稚園児でも知っているというのに。

いや、ちょっと待て、よく思い出してみよう。あの声は本当に知らない人だったのだろうか。昨夜、アヤはあの声を知っている声だと思っただけのことだ。あれを、アヤは誰の声だと思っただろうか。あの時は何故だか確信できていた気がするのに、今ではさっぱりわからない。

そして謎の声は、その後聞こえていない。

「わけわかんない……。どこよここ、おなか減ったよお！」

台詞の最後は、切実な叫びであった。

なんとと言っても、昨夜から口にしたものは冷めたクリームコロッケのみである。しかも半分をパンダにとられた。朝ご飯を抜いているせいで調子が出ないのだ。そうに違いない。

「中に入れなくともいいから、ご飯を要求してみよう！」

哀れな女子高生が目の前で餓死がししかけているのを放っておくほど、あの門番も冷血漢でないだろう。

そう決意してアヤが立ち上がろうとすると、突然、横から声をかけられた。

「おねえさんは二ホンって街からきたの？」

アヤはギョツとしてしまった。

パンダしかいないと思つていたからこそ、大きな声で独り言を言っていたのだ。誰かがずっと近くにいたとしたら、恥ずかしすぎる。

足を投げ出し壁に寄りかかつて座り込んでいたアヤは、慌てて立ち上がった。

「そ、そうよ。あのね、おねえさんは怪しい人じゃないのよ、ちよつとばかりおながが空いていただけで」

少々引きつり気味な笑顔で声のした方を向けば、そこには金髪美少年がいた。

背はアヤよりも頭一つぶん低いだろうか。滑らかな白い肌に、バラ色の頬。艶やかな唇に、くつきり二重まぶたと青い目。それらが絶妙なバランスで配置されている、紛うことなき美少年であつた。

美少年が首を傾げて、さらに尋ねてくる。

「おねえさん、おなか空いているの？」

「いやあ空いているっていうか、なんていうか」

己の腹具合を聞かれるのはものすごく恥ずかしい。初対面の美少年に、腹を空かせた怪しい女認定を受けたくはない。アヤだつて年頃の乙女、カッコつけたい時があるのだ。

しかし、アヤの恥ずかしさなど理解できるはずのないパンダが、隣で盛大に腹の虫を鳴らしてく

れた。

「パンダ。あんた、私からクリームコロッケを分けてもらった分際で、空腹を訴えようっていうの？」

むしろ野生だつたら食料くらい己で狩つてこい。やつぱり朝、なんとかしてパンダを捌いて食べればよかつた、とアヤは考える。すると不穏な思考を察知したのか、パンダが警戒するようにこちらを見る。

アヤとパンダが無言の睨み合いをしていると、美少年が声をかけてきた。

「おねえさん、このヴァーニヤはおねえさんが連れているの？」

美少年は珍しげに、シヨッキングピンクの羽つきパンダを見ている。

「ヴァーニヤってなに？」

問い返したアヤに、美少年が驚いて言う。

「ヴァーニヤを知らないの？ その聖獣のことだよ」

ヴァーニヤ、パンダのパチモンっぽい名前だ。しかも美少年はおかしなことを言っていた。

セイジユウ——聖獣、聖なる獣って意味で合つてる？ これが？ この毒々しいシヨッキングピンクが？

「パンダのくせに聖なる獣!？」

なにより腹が立つのが、パンダが「どや顔」をして、胸を張って偉そうな態度をしてみせていることである。

「聖獣を連れて歩くなら、飼い主の登録証を持っていないと街に入れなよ」

ここで、美少年が先ほどの門番とのやり取りの謎を解いてくれた。登録証というのは、つまりはパンダの血統書のようなものであるらしい。しかしながら、森で勝手についてきたパンダの身のうなんぞ、アヤが知るわけがない。

「このパンダは森の中で偶然ひっかけただけだから、そんなの持ってないわ」

「へえ、群れとはぐれて迷子になったのかな。だったら神殿で登録証を作ってもらわなきゃ」

美少年は、もっと小さな街ならば、登録証がなくても入れるとも教えてくれた。しかし今から違う街へ行けというのか。腹減りでへばっているこの状況で。パンダごときのために。というか、そもそも神殿ってなんだ。

そんなアヤの心に気付いたのか、美少年は空を見上げ、少しの間、悩むそぶりをみせた。しばらくすると「よし」と頷く。

「おねえさん、こっち。中へ入れるところがあるから」

美少年はそう言って、アヤを手招きしつつ門番から遠ざかっていく。

アヤは美少年のあとについて移動しながら、何故ここにいたのかを聞いてみた。彼は人を見送りに来ていたらしい。その帰り道で、行き倒れそうな怪しい女を見つけてしまったというわけだ。

やがて、壁の一部が壊れている場所について。その壊れた壁の一部を塞ぐように、大きめの石がいくつか積み上げられている。美少年はそれらの石を動かした始めた。

「おねえさんも手伝って」

美少年が石を動かすのをアヤも手伝う。しばらくすると、子どもが余裕で通れるくらいの穴が開いた。アヤも辛うじて通れるだろうか。

「ここから入るといいよ」

美少年が先に入っていった、壁の向こうから手招きをしている。アヤも匍匐前進の要領で、その穴を通り抜けた。だが問題は――

「パンダ、あんた通れる？」

「ガルウ」

アヤの問いかけに、パンダは首を横に振る。

正直、置いていってもよかつたのだが、パンダがあまりにもしょげている様子を見せたため、諦めて連れていくことにしたのだ。

結局、もう一度壁の外に出たアヤがパンダのお尻を押し、壁の中から美少年がパンダの手を引く張ることになった。毛を土まみれにしながらようやく、パンダは壁を通り抜けることができた。

こうして美少年に街の中に入れてもらったアヤは、ついでに食べ物を手に入れられる場所も教えもらった。

アヤはパンダを連れて市場をブラブラすることにした。ちなみに美少年とは市場に来る前に別れた。なにやら用事があるそうだ。

「わあー、看板が読めない」

アヤは市場を眺めていてすぐに異変に気付いた。不思議なことに人々が交わす言葉はわかるのに、

看板などに書いてある文字はさっぱりわからないのだ。日本語ではないし、英語などのアルファベット表記ではない。見た目としてはアラビア語っぽい感じである。いや、でも言葉は通じるのだから、きっとここは日本のはずだ。

しかし、そういった謎はひとまず置いておくことにして、今はご飯が先決である。とにかくおなか空きすぎて倒れそうなのだ。いろいろな謎の類は、腹を満たした後でゆっくりじっくり考えればいい。

——まずはご飯！ ギブミー食事！

すれ違う人たちがホットドッグのような食べ物を持っているのを目ざとくチェックしたアヤは、それを売っている店を見つけた。露天なのだが、ずいぶんお客さんが並んでいる。なかなかの人数店なのだろう。アヤも並んでいる列に加わる。パンダを連れているので少々通行の邪魔になってしまったが、アヤにはどうすることもできない。

「おじさん一つちょうだい」

アヤが注文すると、背中をグイグイと押される。振り向けば、パンダがよだれを垂らしていた。よだれがセーラー服についていないだろうかと心配になる。

「……一つください」

しょうがないので、パンダの分も注文してやった。

二つのホットドッグもどきを差し出され、通学バッグからがま口財布を出したアヤは、中身がおかしいことに気付く。

「なにこれ」

がま口財布の中に、見覚えがない金貨や銀貨が詰まっていたのだ。アヤが覚えている限り、このがま口財布には折りたたまれた千円札が一枚に百円硬貨が三枚、それだけが入っていたはずだ。なのになんなのだ、この金貨と銀貨は。

「ちよつとお、早くしてよ」

後ろに並んでいる女性から急かされ、アヤはとりあえず銀貨を一枚出してみた。すると、お釣りとして銅貨が八枚返ってくる。それほど大きくないがま口財布は、コインでパンパンになった。

アヤはまた増えてしまった謎に首を傾げつつも、市場から噴水のある開けた広場に移動してきた。噴水はどういう原理なのか、空中に浮かんだ球体から水が噴き出していて、その水が下にある人工の池に注がれている。なにかで球体を空中に吊り上げているようでもない。不思議な噴水であった。

その噴水の近くのベンチに座り、パンダと共にホットドッグもどきを食べることにする。ちなみにホットドッグもどきを買った後、飲み物も購入していた。色は薄いピンクで、ブドウの味がした。さわやかな後味で朝食にぴったりである。

しばし、一人と一匹はもぐもぐと食事に集中していた。パンダと一緒にベンチでホットドッグもどきを食べているアヤを、通りかかる人々がガン見していくのだが、食べるのに夢中なアヤは気付かない。パンダも物を掴むのに向いていない前足を使って、器用にホットドッグもどきを食べている。

「あー、食べたあ」

「ガル！」

満腹とはいかないが、食べ物を胃に入れたことによる満足感は大い。アヤは朝食は米派なので、この際贅沢は言うまい。

「食事は日々の生活の基本よね、うん」

食事をしたことによって、気持ちに余裕が出てきたアヤは、改めて街並みを見回した。

周囲には、赤っぽいレンガの建物が立ち並んでいる。壁の外とは違って、壁の内側の道路には石畳が敷き詰めてあった。アスファルトではないことに違和感を感じる。道行く人々の格好も、なんだか昔のヨーロッパを舞台にした映画の登場人物が着ていたような服装である。

こういった違和感をあえて一言で表すならば、「フアンタジーっぽい」だ。現代日本で似た場所を探すとしたら、かの有名な、夢の国とかのテーマパークがあるのだが、周囲に観覧車などのアトラクションの類は見当たらない。それに、ここにはテーマパークにはない生活の匂いがする。洗濯物とか、油とか、動物とかの雑多な匂いだ。

「私は一体、どこに来ちゃったんだろうねえ」

そう呟きつつ、アヤはベンチの背にもたれかかり、空を見上げる。抜けるような青空だ。東京で見た空よりも、青みが強い気がする。アヤは、空気が澄んでいると空も青くなると聞いたことを思い出した。

視線を下げれば、噴水が目に入った。空中に浮かんでいる球体は透き通っていて、金属には見えない。ガラスであるにしても、どうやって水が出ているのだろうか。手品の要領で宙に浮いている

ように見せて、ちゃんと水道管の通った土台があるのかもしれない。なにせよ、不思議な噴水である。

「そういえば私、顔を洗っていない」

というより、風呂にも入らず野宿である。そして目の前には水。

あれだけ水が流れ出ているのだから、ちよつとくらい顔を洗ってもいいんじゃないだろうか。考え出したら顔を洗いたくて仕方がなくなってきた。水遊びしているように見せかけて、ばしゃつと顔を洗っても許される気がする。公園の水場ではよくある光景ではないか。『旅の恥はかき捨て』という立派な言葉もある。

「パンダ、あんたちよつと、あの噴水に飛び込んできなさいよ」

そうすれば、パンダ救出という、水に近づく大義名分が立つというものだ。しかし、パンダは嫌そうに顔を背ける。

——朝食を奢ってやったのに、その態度はなんだ！

仕方がないので、アヤはあえて堂々とした足取りで噴水に近付いた。挙動不審にならないようにするのがポイントだ。そうして、噴水の水を両手ですくう。ちよつとひんやりする程度の冷たさで、心地よい水温である。アヤはそれをパシャッと顔にかけた。顔が引き締まる感じがして、ああ朝だという気持ちになる。

「あ、しまった、タオル」

確かバッグの中に入っていたはずだ、とアヤがベンチに戻ろうとした時——

バチバチバチツ!

アヤの頭上でなにかが火花を散らす音がした。何事かと濡れたままの顔を上げれば、噴水に水を注いでいた球体から煙が出ていた。

「へ？」

そして、宙に浮いていた球体は、突然重力を思い出したように落ちる。噴水の水を湛えていた池に落下し、そばにいたアヤに思いっきり水がかかった。

「きゃあ、噴水が！」

「いきなり壊れたぞ！」

「どうなっているんだ!？」

……ひよつとして、自分のせいだろうか？

周囲の悲鳴を聞きながら、アヤは呆然と立ちすくむのだった。

* * *

ヴァーニヤを連れた不審な娘が門を通ろうとした、という報告がきたのは、昼を少し過ぎた頃である。その時、赤騎士隊の隊長アラン・マキアスは昼食の途中であった。

「ぼんで？ 娘の身元は？」

咀嚼していた肉を呑み込み、質問するアラン。

「いや、登録証を持っていなかったの、門番が追い返したとのことですよ」

報告に来た若い騎士の返答に、アランは眉根を寄せる。

「バツカ野郎、不審だと思ったなら、とりあえず捕まえとけよ！」

怒られるとは思っていなかったのか、騎士はびくりと身体をすくませる。

「しかし、理由もなく民間人を捕らえるわけには——」

「別に拘束しなくても、休憩室でお茶させとけばいいだろうがよ！」

気の利かない門番に、アランは苛立ちを見せた。

「ヴァーニヤは裏社会じゃ高額で取引される、最高位の聖獣だぞ。密輸品だったりしたらどうする！」

そう言っつて、アランは昼食の残りを流し込むようにして食べた。せっかくの食事が、これでは味もわからない。ため息をつくど、胃を落ち着かせるためにお茶を飲んで立ち上がった。

「こんなことがサラディンに知れてみる、イヤミを言われるに決まってる」

おお嫌だ、と呟くと、アランは壁にかかっていたマントを羽織って部屋を出た。

その聖獣を連れていた娘というのが、まだ遠くに行っていないことを願って。

* * *

噴水が壊れ、その場で呆然としていたアヤは、パンダに頭突きされてはつと我に返る。

噴水が壊れたのは自分のせい？ 噴水で顔を洗ってはいけなかったのか？

いや、これは偶然だ。そうだろう、ちょっと顔を洗ったくらいで壊れる噴水ってなんだ。そうだ、自分は悪くない。とはいえ、ここにいて、責任を負わされそうでマズい気がする。可及的速やかにここから立ち退くべきだろう。

しかし、時すでに遅し。赤い服を着た目立つ集団が、アヤを指差してなにやら騒いでいた。

「なに、あの派手な集団は？」

「ガル？」

アヤの怪訝そうな言葉に、パンダが首を傾げる。いや、別にパンダに答えを求めているわけではないのだが、つい呟いてしまった。一人暮らしがペットを飼うと、ペットと会話をするようになる聞いたことがある。これがまさしくその現象なのだろうか。パンダは勝手についてきただけで、ペットなわけではないが。

アヤが考え込んでいる間に、赤い服の集団はアヤのすぐ近くまでやってきた。

「赤騎士隊だ」と周囲の人間が囁いているのがアヤの耳に入る。赤い服を着ているから赤騎士隊なのだろうか。そのまますぎて、なんとも微妙なネーミングである。

その赤騎士隊の集団の中から、一人の男性がアヤの前に進み出てきた。三十歳前後くらいの年齢であろう、明るい茶色の髪と目で、なかなかハンサムな顔立ちをしていた。

「ヴァーニヤを連れた娘は門で追い返されたと聞いたのだが、どうして街中にいるんだ？」

ヴァーニヤとは、確かパンダのことだったはず。すると男性の言う娘というのは、アヤのことか。

どうして街にいいのかと問われても、美少年に入れてもらったとしか答えようがない。しかし、あの入り口は明らかに秘密の出入り口っぽいものだった。もし、ここで教えてしまつては、あの美少年に恩をあだで返すことになってしまう。

アヤはなんと言い訳しようかと考えていたが、その男性はどうやらアヤに聞いていたわけではないらしい。

「隊長、これはその……」

言い訳をしようとした集団の一人を、男性はジロリと睨む。

「職務怠慢だ。同じ班のやつら全員、夜間特別訓練だ」

隊長と呼ばれた男性の言葉に、後ろの赤い集団の一部が意気消沈している。

そんな様子を、ただボーッと見ていたアヤとパンダは、隊長の視線がこちらに向けられた時に、もしかして今の間に逃げていけばよかったのではないかと気付いた。しかし、もはや手遅れである。「さて、いつの間にかどこから侵入したのかは知らんが、正門に現れた聖獣連れの娘はお前だな。どうか、ヴァーニヤを連れた娘がそう何人もいてたまるか」

隊長の口ぶりからすると、パンダはやはり珍獣であるらしい。そんな珍獣を連れて市場をうろろしていれば、すぐに見つかるのも道理であろう。

とはいえ、こちらにも言い分はある。アヤはむっとして反論した。

「だって、わけのわからない理屈を言われて追い返されたのよ。こっちが困っていることを聞きもしなかったそつちだって、悪いと思うけど？」

好きでこつそり街に入ったわけではなく、そちらに手落ちがあったのだ。この理屈をこり押しするに限る。こういう場合、一旦非を認めると、なし崩しに罪を着せられるのだから。アヤは伊達に借金生活をしていたわけではない、この手の対処法は心得ていた。言質をとられた方が負けなのだ。一方、アヤが反抗的な台詞を言ったことに、隊長は驚いたらしい。一瞬目を丸くしていたが、すぐにニヤリと笑みを浮かべた。

「それはそれは、部下が失礼をしたようで。ところでお嬢ちゃん、この噴水を壊したのはあんたと街の者らが言っているのだが、本当か？」

しまった、忘れていた。不法侵入と器物損壊。どちらの罪が重いだろうか。

「いやいや、そもそも噴水が壊れたのは私のせいじゃないから」

一瞬、雰囲気呑まれて罪を認めそうになった。危ない、己を強くもっていなければ。

「なにやら言い分があるようだ。詳しくは詰め所で聞こう」

そう言つて隊長が意味ありげに視線を逸らすので、つられてアヤもそちらを見る。するとパンダが赤い集団に縄で捕獲されていた。グルグルと情けない唸り声を上げてアヤに助けを求めている。

「パンダ！ あんた、なに捕まっているのよ!」

アヤが隊長とのやり取りに集中している間に、パンダはうっかり捕まっていたらしい。いや待て、パンダは勝手についてきただけだ。捕まったからといって、アヤが責任をとる必要はあるのだろうか。

アヤがそんなことを考えていると、隊長が釘をさすように言った。

「ちなみに、登録証のないヴァーニヤを連れていることも、罰の対象になる」

「連れているんじゃないやなくて、勝手についてきているだけなんだけど」

「ヴァーニヤに食事を与えていたという証言もある」

「……たかられただけだし」

「グルウ……」

パンダが情けない顔をしてアヤを見る。

思えば、森で会った時にクリームコロッケを与えなければよかった。そこからすでに選択肢を間違えていた気がする。しかし、今更後悔しても仕方がない。なにより逃げられなさそうだ。

「……詰め所つて、お茶くらい出るんでしょね」

こうしてアヤは、赤騎士隊に連れて行かれることになったのである。

赤騎士隊に囲まれて、促されるままに街中を歩く。市中引き回しの刑つて、こういう状況かも知れない、などといつて考えてしまった。

だが、その途中、アヤはおかしなことに気付く。

詰め所と言うからは、交番みたいな場所に連れていかれると思つていたのに、どうして自分は昨夜のドラキュラ城の入り口にいるのだろうか？

「いやだー！ 私はドラキュラには用はない!」

「ドラキュラとやらが誰かは知らないが、噴水を壊した者を連れてくるように魔法省から言われて

いるんだ」

隊長から意味不明な言葉がかけられた。だが城なんぞに入ってアヤが得することはなにもない。城に入って、うっかりドラキュラと遭遇したら、どうしてくれるのだ。

アヤは城の入り口付近で踏ん張って、これ以上に行かないぞという意思表示をしてみせる。すると、面倒臭くなったらしい隊長がアヤを担ぎ上げた。いわゆる俵担ぎである。アヤの頭が隊長の背中にバンバン当たる。

「うぎゃあ！ ちょっと降ろしなさいよ！ 頭に血がのぼる！」

「やかましい、こっちだって忙しいんだ。お前一人に時間をかけていられないんだよ」

そう言っただけで隊長にびしやりとお尻を叩かれた。お尻を触られた、セクハラだ！

「エッチ、スケベ、変態！ スカートをめくるな！」

物珍しいのか、隊長がひらひらと揺れるプリーツスカートをいじっている。

「こんなめくれやすい長さの服を着ているお前が悪い」

「これは女子高生のセーラー服にとって適正な長さよ！」

体勢が悪いのと興奮しているのとで、余計に頭に血がのぼる。鼻血が出たらどうしてくれるのだ。「痴漢がいるー！」

「人聞きの悪いことを大声でわめくな！ ガキのくせしてマセてやがる」

確かに、アヤは背が高い方ではないし、顔立ちも大人びていると言いがたい。しかし、だからと言っただけで十七歳の女子高生に対してガキとはなんだ。

——こちとら、日々労働して生活費を稼いでいる勤労学生だ！

抗議の意味で、両膝を使って隊長の上半身にガンガン膝蹴りを入れる。すると、「痛えんだよ！」とまたお尻を叩かれた。セクハラ二回目！

そんなこんなで、ぎゃあぎゃあ騒いでいると、隊長が急にびたつと足を止めた。やっと降ろしてくれる気になったのかと思えば——

「うるさいぞ、廊下でなにを騒いでいる」

心地よいテノールの声があった。アヤには見えないが、前方に誰かいるらしい。今までだって、周囲を行きかう人間は大勢いたものの、その誰も隊長とアヤを呼び止めたり咎めたりしなかった。それが、初めて声をかけられたのである。

「閣下、お騒がせして申し訳ありません」

閣下とな。そのような呼ばれ方をする人間に、アヤは人生で初めて会った。

閣下と呼ばれた男性が、こちらに近寄ってきたらしい。さっきよりも近くで声が聞こえた。

「ひよっとしてソレが、魔法省が騒いでいた、噴水を壊したという者か」

「さようでございます。抵抗するので、こうして運んでいるところです」

「なによー、壊してないってば！ 噴水で顔を洗っていたら、勝手に球が煙噴いて落っこちたんだってば！」

通りすがりの見知らぬ偉い人に、ナチュラルに犯罪者認定されたくない。事実の訂正のため、ここははっきり言っておかねば。

「きつと、あの噴水がもともと壊れてたのよ！ それか不良品よ！」

「ほおう？」

テノールの声が幾分か低くなる。妙に背筋がゾクツとくる、色気のある声だ。けれども今は、色気ではない他のなにかに鳥肌が立った。マズい、まさか地雷を踏んだのか？

「バツカやろ……」

隊長が低く呻く。なんだなんだ、いかんせん対象にお尻を向けているので、アヤは相手の様子から空気を読むこともできない。

——いいから降ろせ、さっさと降ろせ！

アヤが再び隊長に膝蹴りをしようとした時、テノールの声の主が不機嫌に言い放った。

「あの噴水の魔法構築式は私の作ったものだが、それが不良であったというのだな、このデカ尻娘は」

「……なんですつてえ？」

お尻が人よりちよつぱり豊満であることは、アヤのコンプレックスである。それをはっきりと貶されたとあつては、乙女として黙っていられない。

「アンタが誰だか知らないけどね！ 自分のへボさを他人のせいにするんじゃないわよ、このハゲ！」

相手がハゲているかどうかは未確認だが、目には目を、悪口には悪口を作戦である。

すると、アヤを担いでいる隊長から、またしてもお尻を叩かれた。太鼓ではないのだから、乙女

のお尻を気軽に叩かないでもらいたい。

「バカかお前は!? お前の前にいるのは、この国の宰相閣下だぞ！」

宰相閣下つて、ひよつとして偉い人間なのか？

* * *

アヤが宰相閣下と衝撃の対面をしている時、パンダはといえば、

「ヴァーニヤつて、風呂が好きだったんだな」

「聖獣とはいえ獣だし、水を嫌うと思うんだけどな」

「ガル〜」

と、有難い聖獣として、赤騎士隊の隊員からもてなしを受けて、まったく風呂に浸かっていた。風呂の中で果物まで食べて、ご機嫌なパンダだったが、アヤはパンダのようにご機嫌とはいかない。

不用意な発言で宰相閣下の怒りを買ったアヤは、当初の予定とは変わり、魔法省とやらではなく宰相閣下直々の取り調べを受けることになったのである。

どこかの一室に入り、ようやく俵担ぎから解放されたアヤが見た宰相閣下は……ハゲてはいなかった。

年齢は隊長と同じくらいだろうか、長身ですらりとした細身の体型であり、背の中ほどまで伸ば

された輝く銀髪は、ゆるく後ろで纏められている。肌は、美白に命を懸けている世のお嬢さん方に喧嘩を売っているのかと言いたくなるほど白くてシミ一つない。目鼻立ちも整っているが、今は灰色の目がアヤを陰しく睨んでいる。

わかりやすく言えば美形だ。アヤはハゲなんて言ったことを心底謝りたい。

今いる場所は、お城の宰相閣下の執務室だそう。座らされたイスのクッションがふかふかで、アヤとしては逆に座り心地が悪い。

「まずは名前と年齢、出身を言え」

「葛城綾、十七歳。東京生まれの東京育ちよ」

隊長の質問に対して、別に嘘をつく理由もないのでアヤは正直に答える。

「カツラギ・アヤ、珍しい名前だな。トーキョーというのは、響きからして他の大陸の地名だろうな」

「お嬢ちゃん嘘はいけないな、背伸びにも限度があるぜ。どう見たって十二、三歳くらいだろう」

宰相閣下のコメントはまあ置いておくとして、隊長はどうして疑問形でなくて断定形なのだ。童顔で悪かったな！

「真正正銘、十七歳！」

アヤはきつぱりと言いつ切る。すると隊長と宰相閣下がひそひそと、

「閣下、アレが成人女性に見えますか？」

「胸はないし肉付きも悪いし、どう見ても子供だな」

などと、失礼なことを言い始める。

——胸がないとは失敬な！ 胸は現在、鋭意成長中だ！ 胸の大きさが大人のしるしなんかじゃないやい！

アヤが失礼な男二人を睨むと、宰相閣下は「フンッ」と鼻で笑った。これはアレだろうか、

「ハゲ」呼ばわりしたことを、実はすごく怒っているのだろうか。ひよっとして、毛髪量を日々気にして、その仕返しを受けているとか？ 人を呪わば穴二つなのか。いや、気を強く持とう。こちらは被害者のはずだ。

「では次、ヴァーニヤをどうやって見つけた？」

「この近くの森で、食べ物分けてやったら勝手についてきたんだけど」

隊長の次の質問に、これもまた正直に答える。

「閣下、聖獣は餌付けされるものなのですか？」

「たとえ本当だとしても、おおっぴらにはできないな。聖獣の品格に関わる」

パンダ相手に品格と言われても、アヤとしては笑いが込み上げるばかりである。

「ところで、パンダは今、どこでどうしているの？」

アヤは少し不安になって尋ねた。パンダとは城に入る前に引き離されて以来、それっきりだ。あんな珍妙なパンダでも、離れるとなんだか心細い。

「あの聖獣のことか？ ちゃんと保護しているぞ。全体的に汚れていたから洗うように言っている。どうしてあんなに土まみれになっていたんだ？」

逆に隊長に質問された。何故かといえば、壁穴を強引に抜けた時に汚れたからだ。しかし、それは美少年とアヤとの秘密である。

「そんなのどうだつていいじゃない。それより、私の無実は証明されたんでしようね？」

話を逸らしつつ、アヤはそもそもここまで連れてこられることになった本題に入る。

「あー、それはだな」

「小娘、これを持て」

隊長が答えるのを遮り、宰相閣下が、アヤになにかを差し出す。変なものだったら嫌だと思つてアヤは手を出さずにいたが、宰相閣下の視線による圧力に負けた。

そうして差し出した手のひらに載せられたものは――

「なにこれ、電球？」

見た目、ちよつとレトロな白熱電球である。こんなものが一体なんだというのだろうか？ アヤが首をひねっていると、急にボン！ という音と共に電球から煙が噴き出した。

なにやら、見覚えのある現象である。

「やはりな」

「魔力灯が!? どうしたんですか？」

納得したように頷く宰相閣下と、驚く隊長。もちろん一番驚いているのはアヤである。

「理由はわからんが、小娘は魔法拒絶の性質を持っているのだから」

「……たまーに、魔法具との相性が悪いやつがいます、あれが酷くなった感じですかね？」

「そのような認識で、概ね正しい」

正直、アヤは情報過多で頭がパンク寸前である。

魔法とか、魔法具ってナンデスカ？ 拒絶つて、身体から妨害電波でも出ているつてことですか。

そもそも、ここは一体どこですか。

ここは東京の近くじゃないんですか、つていうか東京を知らないんですか。

疑問はいろいろとあるものの、なにより大事なことは――

「あの噴水を壊したのは、私つてことですか？」

「損害賠償請求額はいくらになるんだらうな？」

宰相閣下がにこやかに笑つていた。

―― 損害賠償、私が払うの!?

それから小難しい話をされたり、お小言を言われたりしたが、アヤが噴水を壊し、その賠償金を払わなくてはいけないという事実は覆らなかつた。

その上、すつたもんだの挙句、アヤの身柄は宰相閣下に預けられることになった。

なんでも宰相閣下の言い分としては、こんな近寄るだけで魔法具を壊す輩を野放しにしてはおけないとのこと。どうやら危険人物認定されてしまったようである。

宰相閣下の執務室での取り調べの後、汚れていると言われたアヤは二日ぶりに風呂に入り、土まみれのセーラー服の代わりにシンプルなワンピースを与えられた。着替えを終えると、パンダがアヤのもとに戻つてきた。

そして現在アヤは、何故か宰相閣下と夕食をとることになり、その席で今後の処遇について説明されている。どうやら城に住まわされるらしい。

「私はお城になんか住みたくない」

今まで六畳一間のアパートに住んでいたアヤにとって、城はムダに広くて煌びやかで、非常に居心地が悪い。そして問題はそれだけではない。

「どうして私がアンタの部屋に住まなきゃいけないのよ！」

一番の問題は、何故か、アヤの居場所が宰相閣下の私室であることだ。

厳密に言えば、宰相閣下の私室の隣にある、使用人の部屋である。しかし宰相閣下の私室と使用人部屋はドア一枚で繋がっており、鍵などはない。主が緊急の用を命じた際は昼夜問わず駆けつけなければならぬので、その用途からするとわかる気もするが、年頃の乙女としては大問題だ。

「緊急措置だ」

宰相閣下がそっけなく言う。

「表向きは、私付きの小間使いということになる」

その労働の対価で、壊した噴水を弁償しろということらしい。

「またもや借金なのか。しかも今回は父親ではなく自分の借金である。どこまでも借金の二文字はアヤに付きまとうらしい。」

ちなみにパンダはアヤたちと同じ部屋で夕食をもらって、幸せそうに食べている。悩みがなさそうに羨ましい限りだ。宰相閣下にこのままパンダを飼っているのか尋ねると、問題ないと言わ

れた。

アヤとしても、食事に罪はないので、残さず美味しく食べさせてもらった。

美味しい食事をいただき、食後のお茶を飲んでまったりとした空気が漂っている時、アヤはさりげない様子を装って宰相閣下に声をかけた。

「ねえ、そっちの質問にはあらかた答えたわけだし、私もちょっと、聞きたいことがあるんだけどなあ」

「なんだ、唐突に」

本当に唐突だと自分でもわかっているが、そこはスルーする。

「いいじゃない、別にご大層なことを聞きたいんじゃないの、世間話つてやつよ」

「……答えられることには、答えてやらんこともない」

後で後でと、ずっと後回しにして、考えないようにしていることがいくつもある。それらを探ねるのは正直怖い。しかし、知らなければ、この先の人生設計も立たないのだ。少なくとも、昨日までの人生の予定表にパンダは登場しないはずだった。これがもう大きくズレている点である。

まず第一の質問。

「ここは、どこなの？」

「奇妙なことを問うのだな。ルドルフアン王国王都イゼリア、その中心にある王城だ」

アヤが恐る恐る絞り出した質問に、宰相閣下はあっさりと答える。日本ではないかもしれないと予想していたものの、面と向かって答えられると、脳にガツンと衝撃が走った。

「そう、知らない国だわ。ねえ、日本って知ってる？」

「二ホン？ 聞かない名だが、地名か？」

「私が住んでいた国の名前よ。小さな島国だけど、世界中に知られている国なのよ」

「……知らないな」

「そう、知らないんだってさ、ははっ」

アヤは乾いた笑いを漏らす。

いつの間にか、パンダが傍まで寄ってきていたので、そのフワフワの毛皮を撫でる。思いのほか癒されたので、もっと力を込めてガツシガツシと撫でたら、距離をとられた。薄情者め。

宰相閣下はアヤが地理を知らないと思ったのか、地図を持ち出して、この国の位置を示してくれた。その地図は、アヤの見慣れた世界地図ではなかった。

ここは日本ではない。たぶん、地球でもない。納得できるわけがないが、理解しなければならなかった。

謎が一つ解決……しているかどうかはわからないが、少なくともアヤの中で諦めはついた。よって、第二の質問。

「魔法って、呪文とか唱えたり、杖を振り回して火の玉を出したりする、不思議な技のこと？」

「なにやら発想が幼児並みだが、初歩の魔法は概ねそうだ」

今日一日でたくさん聞いた魔法というのは、アヤがイメージする魔法とあまり変わらないようである。先ほどの白熱電球もどきも、魔力灯と呼ばれていた。窓から外を見ても電線は見えないし、

電化製品も見当たらない。今、部屋を照らしている明かりも蛍光灯ではない。もっと自然光に近い明かりだ。

「この魔力灯？ っていうのも、魔法？」

「これも初歩の魔法の一つだな」

こういった魔法の力で動く道具のことを、魔法具というらしい。

正直バカにされるかと思っていたのだが、宰相閣下は丁寧に答えてくれる。説明を聞き終えたアヤは、森で会った怪しい男が言っていた「転移魔法の事故」という言葉を、今になって思い出した。

こうなったら認めてやろう。アヤはどうやら、魔法が存在する異世界に迷い込んでしまったようである。

その後、なんだかいろいろ会話をした気がするが、あまりのショックで上の空だったのか、ほぼ覚えていない。

そして、一夜が明けた。

ソファの上で目を覚ましたアヤは、窓から差し込む朝日に目をしょぼしょぼさせつつ、うーんと伸びをした。それによって、アヤにかけられていた毛布がずれ落ちる。

「朝かぁ」

パンク寸前だった頭は、熟睡したおかげでスッキリしている。

昨日は宰相閣下の話を聞きつついろいろ考えてしまったが、これからどうしようという件につい